

# 都市空間と社会秩序

高 野 洋 志

岡山理科大学総合情報学部社会情報学科

(1997年10月6日 受理)

## I. 都市の外観

都市空間を「高密度な人間集合の形式」<sup>1)</sup>とする定義は、いわゆる「ツンフト」の歴史と切り離して考えられないヨーロッパ型の都市空間にこだわらず、アジアやアフリカ地域の都市もふくめて、都市一般を考えることにつながる。しかし近代的都市のモデルは、少なくとも最初は、ヨーロッパが提供したものであり、その都市空間は、情報の伝達・交換の早さや蓄積の量を保証し、分業と多様な活動の総合を可能にするといった一般的な機能の面からだけではなく、調和のとれた景観をつくり、思想、科学、そして制度の発展の最前線となってきた。

ヨーロッパの都市は、メソポタミアに始まる古代都市文明の影響下で発生した。ピラミッド型の聖塔（ジグurat）を中心として高く堅固な城壁で囲まれたシュメールの都市に似て、ヨーロッパの中世都市は高い塔をもつ教会を中心として防壁で囲まれていた。教会は、この都市が広大なキリスト教世界内に占める位置をあらわすと同時に、住民の心を同じ信仰で結びつけ、信仰にかかわる行事や通過儀礼の場として、日常的な秩序を生みだした。市街地を囲む防壁は、不安定で行政上の一貫性のない広域社会において、共同体を作る住民の活動と富を守る役目をはたした。

西欧の近代国家が成立する過程で、都市市民は「国民的市民」へと、横への広がりを持ち、城壁は国家的秩序のもとでその意味を失う。工場区域の拡大と労働者街の出現、市街地をこえて周辺の農村までを管轄に治めた、行政、教育、医療などの公的機関の設置にみられる近代都市の特徴は、産業革命以降のものである。世界市場化と植民地化によって都市と農村の関係は、一国の枠をはるかに越えていく。西欧の大都市には、この世界進出の結果、メソポタミア、エジプト、古代ギリシアなど、古代文明の遺物が博物館や広場に飾られ、新しい文明を象徴する壮大な建造物が中心部に造られる。また、西欧型の都市建設がアメリカ大陸などで行われ、アジア、アフリカ地域の古くからの都市にも大きな影響を及ぼしていく。

そして、北米で急速に発達した現代の産業都市においては、景観の上で、経済や行政の活動の密度の高さを意味する高層建築街が、中世都市の教会のように都市空間の心臓部となり、自動車道路と地下鉄が人と物資を、さらには目にはとまりにくいさまざまなケーブル

がエネルギーと情報を流通させている。

都市の出現は、古代文明では国家的秩序の誕生を意味した。そして都市は、その後機能や社会組織上の変化はあっても、文明の拡がり和社会発展の水準を証明する、最も目につく指標であり続けた。しかし、現代の先進国の大都市は2重の危機をむかえている。ひとつは、急速な産業構造の変化が人口の出入りと市街地の変容を加速するため、地域を限定した住民の自治が困難になっていることである。先進国の大都市は世界中から資源と労働力を調達し、国際社会に根をおろしている存在であるにもかかわらず、国家という巨大な組織と制度のなかに埋没し、均質化され、制度の改革についても、芸術、知識、技術などの面においても、国家の管理から脱して文明の先端を走ることが難しくなっている。同様の理由から都市住民は、大気汚染、ゴミ処理問題など、極端な集住と消費型生活に由来する基本的環境問題をみずから解決できない。従って巨大化した都市は、その整然とした外観とは裏腹に、人間にとって快適な生活場所を提供できず、地球環境破壊の最前線となりつつある。では、こうした危機を克服するための手がかりはどこに見出すべきであろうか。

## II. 都市と農村

都市は食料や人間を供給する周辺地域がなければ存続しえない。しかし「都市は不思議なところである。古今東西、農村に飢えはつきものだが、都市が飢えることはめったにない」<sup>2)</sup>といわれるように、人間の集住密度の高いほうが生存に有利な条件を提供してきた。「群れ」をつくって生活することに由来する人間の本性として結論づけることもできよう。そして、社会に、群れの密度と規模が大きいところと、比較的希薄なところができるようになってからは、前者のほうがより生存に都合のよい環境を提供してきた。

古代ギリシア世界でアテナイによる制覇をさまたげたスパルタは、後世にその遺跡や記録が残るような壮麗な都市の建造物はつくらなかった。しかし「スパルタ市民」は存在していた。重装歩兵となったラケダイモン人のうち、彼らのみ国政に関与する資格があった。城壁に囲まれた市街地を持たなかったのは、アゲシラオスの「スパルタの城壁は青年たちの勇気である」という言葉にみられる強国としての自負によるものであると同時に、「貴族制にとっては複数の要害の地に城砦を築くほうがよい」<sup>3)</sup>という政治体制からくる防衛方法の選択でもあった。ヘイロータイとよばれた、先住民あるいは他のギリシア系民族の農奴支配に経済基盤をおいていたスパルタは、農奴の反乱により体制が幾度も危機に陥った。1度目は前7世紀のメッセニア人の反乱、2度目は464年の大地震をきっかけに生じた農奴の反乱、3度目はペロポネソス戦争の際にアテナイ軍がピュロス島を占領し、前8世紀の征服戦争以来農奴化されていたメッセニア人に反乱や逃亡を呼びかけたときである。そして前4世紀前半、テーベがスパルタに勝利し、メッセニアが独立してしまい、スパルタは完全に力を失ったといわれる。集住が効率的支配の手段であっても、物質的基盤のない都市は、支配集団の弱体化とともに消えざるを得なかったのである。

集団による他の異民族集団の奴隷化を行って、防壁で囲まれた市街地をもたなかったスパルタに対し、アテナイの場合は、奴隷が市民個々人の財産の一部をなしていた。また市民権を持たない自由民が市街地で商工業に従事し、アテナイ経済の一端を担っていたゆえに、防壁でかこまれた空間内に居住していた。しかし、防壁の外に居住するアッティカ住民の多かったことは、ペロポネソス戦争が始まってすぐ、アテナイが避難民を受け入れた際、人口が急増して生活環境が悪化し、疫病が猛威を振るったことからわかる。また古典期のアテナイ市民の中にはアッティカのみならず、ギリシア世界の各地に所有地をもっていた者もあったことが知られており、都市市民に対して農民という区分はもちろん、文化の上でもそのような対比はできない。政治面だけでなく、経済と文化の面でギリシア世界の中心となり、自由民が多く居住したアテナイは、都市文明の発展に大きく寄与した。

西欧では、封建領主に支配される農村に対して、商人および手工業者達のツunftないしギルドが都市の自治権を手中におさめてから、都市と農村の生活文化が異なってくる。ツunftによる秩序の確立は、防壁に囲まれた都市空間内にかぎられたわけではなく、生産地と市場を結ぶ通商路の独占と安全をめざして、周辺地域におよんだ。ハンザ、ライン同盟、シュヴァーベン同盟などの都市同盟が成立して、共同の軍事力を用い、商業活動の安定化を達成するに至って、神聖ローマ帝国内全域にこれらの都市同盟による秩序を及ぼそうという皇帝もでたりほどである。しかし、都市同盟による周辺地域の支配は農村にまで及ばず、封建領主とその経済基盤があまり変化せず残り、さらに1525年に始まった大規模な農民戦争が諸侯軍に敗北したことで、19世紀に至るまで都市経済と農村経済が分離したままになった。

都市が農村を支配する領域国家を形成したイタリアでルネッサンスの都市文化が開花し、やがて、自治都市の勢力が軍事力をもって、ハプスブルグや諸侯の勢力から周辺地域を奪い、農村部の支配を確立したスイス、さらにスペインから独立を勝ちとったオランダで都市連合国家が誕生し、西欧の市民革命の先導役を果たすことになる。

14世紀は、西欧全体で農業生産が後退したが、それに加えて戦争の多発とペストが人口の減少をもたらした。フランスでは、百年戦争が、イギリスではバラ戦争が封建領主の没落に拍車をかけ、王権の強化につながっていく。そして王都としての特権の大都市が、社会、文化の変化と制度改革の先頭になつた。

近代のはじめまでヨーロッパを圧迫し続けたイスラムの帝国下では、西欧型の自治都市は発達しなかった。都市生活と農村の生活との対比はあまり意味をもたず、遊牧生活との対比のほうが、乾燥地帯にあっては普遍的である。都市住民の行動の指針はイスラムの法と法解釈の権威者（ウラマー）であり、それらに従う限り商業活動の自由は保証された。行動的な商人達のもたらした、世界各地の様々な産物や知識がイスラム圏の諸都市の繁栄につながった。この繁栄が産業革命につながらなかったのは、世俗的禁欲主義、とりわけ勤勉さを尊ぶ倫理観がイスラムに欠けていたせいかもしれない。しかし、経済活動や文化

水準など、都市文明の実質は、イスラムの帝国下で発展し、西欧に伝わってルネサンスに結びついたとされるように、中世のイスラム圏の諸都市は、文明の最先端にあった。

都市に食料と安い労働力を提供するのには農村である。近代西欧社会では、都市の産業の発展、労働力、食料や嗜好品の必要性が、国内だけでなく、国際的に農業を変化させ、農地の拡大をうながした。

屋内での労働はランプなどの照明さえ使用すれば、夜間でも可能だが、屋外の労働はそうはいかない。夏と冬の日照時間の差は、高緯度であればあるほど大きく、しかも気象条件も極端にことになってくる。都市と農村の労働形態の差は、もとをただせば、このような活動の場における物理的な条件の違いに由来するであろう。都市における産業の発展は、労働者人口を増大させ、常設市を増やし、都市の生活を、次第に天候や季節変化に左右されない、規則正しく、均質なものにしていった。一方、おおよそ温帯の農耕社会での生活時間は、穀物の播種から収穫までの過程や、きびしい冬に耐えて春を迎える喜びによって区分された1年の周期を基本にしてきた。

農耕に関連した周期的儀礼は、エリアーデに従えば、「聖なる時間の生産力」を再生するために行われた。俗なる時間は様々な罪障や悪霊によってけがされていくので、聖なる時間を顕現（エピファニー）させるために、悪魔払い、懺悔、祖霊を迎えまた他界に送り返す、対抗競技、オルギーなどの要素を組み込んだ儀式を行う。そうすることで、創造神話を再現し、信仰を新たにし、日常的抑制を解除して気晴らしを行い、労働意欲を取り戻す。都市においては、労働が自然のサイクルとの関連を失い、気晴らしや娯楽が季節の推移に従う必然性も希薄になる。農耕の周期的儀礼に見られた伝統芸能は農民自身が伝えてきたものだが、都市においては専門化し、常設の劇場や酒場などで日常的に享受できる娯楽となっていく。また、祭りの行事としての対抗競技も「スポーツ」として発達していく。

そして、農村においては暦の上で定められた日にだけ出現した、非日常的な祭りの空間は、都市においては、日々の労働の終了後、娯楽と気晴らしを提供することのできる歓楽街として日常化する。同様に、人口の少ない農村において、質の違う活動は時系列上に配置されていたが、都市においては、空間的に区分され、同時に行われるようになっていった。

### Ⅲ．農村の都市化

かつてイタリアの諸都市が、それぞれ小さな領域国家として繁栄しルネサンスの先導役を果たすことができたのは、農村を支配し、地中海という商業活動の場をもっていたからである。今日の先進国の大都市の繁栄は、自国の農村だけでなく周辺の発展途上国の農村にまで支配を拡げ、国境を越えて労働者や食料が流入するという規模の背景をもつ。しかし「今日の資本主義的な工業化と都市化は、先進諸国の内部においても第三世界の全体についても、一方では大都市への過度な人口集中と都市それ自体の自壊、他方では地方の農村の過疎化と荒廃」という過密・過疎の二重の宿弊を抱えて共倒れの危機をはらんでいる。

しかも、巨大症の大都市が郊外も田園も村落も飲みつくし、統一も目的もなくアメーバのようにその触手状の手をどこまでも伸ばしているのも、世界各地に共通して観察される<sup>5)</sup>と土井が指摘するように、大都市の持つ強烈な向心力が、周辺に向かう際限のない都市化を引き起こしている。

都市に流入する人々をひきつけているのは、雇用と豊かな生活条件である。また農村でも都市が必要とする商品として、高収入をもたらす作物を作ったり、家畜の飼育をして、都市と同質の生活を目標として追求するようになる。都市文明は生活を楽しむような新しい道具やイメージをつぎつぎと生み出して農村に生活する人々を魅惑してきた。このことも都市化に歯止めがかからない理由のひとつである。

都市の巨大化はまた大きな環境問題を引き起こしている。自動車の排気ガスによる大気汚染は1例にすぎないが、ドイツなどの都市では、自家用車の乗り入れ規制を実施し、かなりの効果をあげている<sup>6)</sup>。公共の交通機関さえ整備されるならば、それほど不便はないはずである。高速道路の建設や駐車場の増築は一時的に交通渋滞を緩和し、便利になるようでも、人間の集まることのできる空間を圧迫し、事故の危険を増大させ、一層街中に車の数を増やす。歩行者を優先する措置や、自転車が危険なく使用できる環境を整えることは日本ではごく限られた範囲で実行に移されているにすぎない。まだまだ広がりが足りないのは、自動車の需要が落ち込むことを恐れての消極性であろうか。

過疎化のすすむ農村の財政難につけこんで、「周辺整備」などの予算的措置をエサに、原子力発電所の建設、核廃棄物処理場、産業廃棄物処理場その他の都市による環境破壊のしりぬぐいを農村にさせようとする。原子力発電が、二酸化炭素排出量を減らす上で決め手となるほどクリーンな手段でないことはすでにあきらかなので、欧米ではすでに原子力発電に関する政策を転換しているが、日本はむしろ依存度を高めつつある。

#### IV. 日本の都市

日本の都市の外観が、「保存に値するような形姿に建設されなかった」理由を内田芳明は次のように説明している：まず「日本人は都市密集集合住宅の形式を知らなかったので……都市建造物を、都市全体の風景の統一と調和という視点から、建て方を規制するための原理がなく、またそれを表現した法的規制も存在しないため」乱開発が出現した。また、「風景の調和と統一という視点」の生まれなかった理由として、日本文化が「自治的共同体(ゲマインデ)としての都市と市民を知らなかった」こと、「文化と教養の担い手としての富裕な市民階級が存在しなかったことをあげている<sup>7)</sup>。日本の都市について問題点の指摘は多い。上田篤は、①醜い、②伝統的建築が少ない、③緑が少ない、④住宅が貧しい、⑤物価が高い、という5点をあげている<sup>8)</sup>。しかし上田は同時に評価される点もあげている：①安全、②清潔、③便利、④盛り場に活気があり、退屈しない、⑤社会階層による差別がない<sup>9)</sup>。特に上田は④に関係して、「調和」を重視するヨーロッパ都市にたいして、日本の都

市が活発に「新陳代謝」している点に注目する。

西欧においては、都市全体の美的景観を構想する主体が富裕な市民階級であった時代が過去のものとなり、産業都市化が進むと、中世からひきつがれた調和のとれた外観はもはや維持されがたくなった。現代においても中世のたたずまいを残しているのは、この産業都市化をまねがれた都市あるいは地域に他ならない。その点で戦後日本において、大量の人口流入と「高度成長」を経験しつつあった大都市と、産業都市化をまねがれたヨーロッパのむかしながらの都市を比べるのはあまり意味のあることではない。富の蓄積と文化水準の上昇に従って、日本の都市の外観も少なくとも中心部については良いほうに変化していくであろう。それよりもむしろ日本と大都市の問題のひとつは、市街地の無秩序な拡大にあった。

戦後日本では旧来の市街地の周囲に、農地を犠牲にし環境への配慮なしに大規模な工業地帯を作ったり、住宅地を開発したため、大都市の交通事情や生活環境が急速に悪化していき、「公害列島」と化していったことは記憶にあたらしい。

かつて農村から産業都市へと大量の人口流入が生じたとき、故郷を離れた人々は、家族的な終身雇用の企業に迎えられ、都会の一角に自分の場所を得た。今日彼らを迎え入れたような製造業の中小企業は、大企業の下請けとしてのみ存続しうるし、サービス業などでは、もはや終身雇用が消えて歩合性に移りつつある。休日が増えるなどうわべはよくなったようにみえても、被雇用者が消耗品化しつつあると云ってよい現状であり、都市人口が流動化するあらたな条件をつくりつつある。

都市住民に自治の文化が育ってないのは、日本の都市がどこもよく似ていて個性のないことにあらわれている。都市に独自の文化や自治という社会的向心性が欠ける場合、地方都市が巨大都市の衛星化し、創造的活力を失い、中央の動向に左右されて景気動向による人口の流動化も生じやすい。そして巨大都市では無秩序な拡大により、周辺から流入し都市に住みついた人々が、大変不定形な社会を作り、共通の利害意識や問題意識にまとまることがなかった。経済成長が鈍化した今日において、漸く人口の移動も鈍化し、地域文化の育成に住民の目が向いつつある。

## V. 都市の空間区分と秩序

教会を中心として、市の開かれる広場、市庁舎そしてその外側には手工業者の工房と、その上の階に住宅、中世都市のこうした外観はあまり細分化されていなかった。

今日の大都市では大きな面積を占めている教育機関は、西欧では教会の聖書学校にはじまっている。11世紀以来北フランスの大聖堂の評議員団が組織した教会学校のように<sup>10)</sup>修道院よりやや自由な環境のもとで行われた学問が、知識の職人としての教師をつくり、同時に知識を求める学生を育てた。そして彼らのギルドが大学を生んだ。もともと大学での講義は、教師や学生の宿所、教会、広場その他の都合のよい場所で行われていた。「自治権」

を持ったキャンパスに発展していくまでには、周辺市民、教会や世俗権力に対する、法王権を後ろ盾にした長い闘争があった。

12世紀の半ばから、イタリアの商業都市では子供たちに対する、読み書きと計算など初等教育を行う私塾ができる。これも教会の絡んだ学校とはべつの、世俗的な専門学校の起源となった。こうして中世西欧都市に生まれた、自由度の高い、教育や学問の空間は、近代西欧社会の知識・技術水準の源となっていく。

中世都市の外の、門からあまりはなれていない道路端には、絞首刑に処せられた死者が見せしめにそのままぶらさげられているという光景がめずらしくなかった。禁固刑というのは19世紀になって一般化してきた刑罰形態で、それ以前は死刑を含む身体刑、追放および罰金刑が刑罰の大多数を占めていた（ミシェル・フーコーによれば「パリのシャトレ裁判所の1755年から1785年における判決のうち、死刑は……9ないし10パーセントを占め……大多数は追放もしくは罰金刑だった。ところで、これら非身体刑の大半は付加刑として、晒し者の刑・晒し台・鉄首枷・鞭打ち・烙印など、身体刑の次元をふくむ刑罰をともなっていた。」<sup>11)</sup>。また彼は、社会秩序を乱す行為に対し、死刑を含む身体刑が行われるのは、死が身近でありふれた現象である社会での「身体への《蔑視》」、そして社会的機能として「真実を明示するもの、しかも権力を運用するもの、だからである」<sup>12)</sup>と指摘する。すなわち、刑の適用にいたるさまざまな手続きの正当性を証明し、犯された「重罪によって予測されるか、もしくは惹き起こされる混乱状態……恐怖」<sup>13)</sup>を彷彿とさせるような残忍性を報復の意味で再現するためであったとする。ここでは、司法制度と権力が、残虐行為をふんだんにとりいれたバロック演劇に共通する出し物とそれを求める観客の存在を前提にした劇場を、都市に生み出していた。

司法制度の改革は、刑罰の過酷さを緩和する方向で行われたのではなかった。しかし、相互に利害のことなる階級や階層によって、違法行為のタイプや意味も多様化し、見せしめとしての身体刑は、犯罪の種類と犯罪者の身分によっては、見物人にカタルシスをあたえるところか逆効果をもたらすこともありえた。「それらの犯罪〔＝法律違反〕は正しく規定され、確実に処置されねばならないし、不連続なやり方で、釣合いを欠く華々しさをともなって黙認され認可されている、こうした多量の規則違反のうち、なにが黙認しがたい犯罪であるか定めて、それが逃れるわけにいかぬ懲罰をかさねばならないのである」<sup>14)</sup>とフーコーは説明している。

身体刑や追放到に監禁がとってかわったのは、フランスではナポレオン帝政下であり、ヨーロッパの他の国においても19世紀前半、つぎつぎにかわっていった。監視塔のある高い塀が、監獄内での受刑者の日常生活と、都市住民の日常生活を隔てる仕切りとなり、監獄内では外部以上の厳格な秩序が受刑者に強制される。

ベストの大流行以前に、癲病患者は西欧社会から姿を消しつつあった。癲施療院であったところにはかわりに廃疾者や狂人が収容されるようになった。しかし、市民でない場合

は追放されることが多かったようで、「阿呆船」に寄せられた狂人は「航路の途上で囚人になって」<sup>15)</sup>定住すべき場所を失った。17世紀になると、西欧社会では、社会秩序を乱すと考えられた「一般法の受刑者、家庭の法をみだし財産を乱費する子弟、放浪・無頼の徒」<sup>16)</sup>達と一緒に監禁されるようになった。フランス大革命以降、次第に「狂気」の分類が行われるようになり無差別の監禁は行われなくなった。そして「精神病患者」として医師の治療の対象となってくる。

現代都市では、精神病あるいは精神障害は他の病気や身体の障害と同様に扱われ場合によっては施設に収容され、必要に応じて入院治療を受けられるようになってきた。しかし、病院における精神病患者の人権問題は、患者の側からの発言が無視されがちであるために、いまだに議論の余地があるといえる。さらに、大都市の社会環境が人間の精神に与える否定的な影響については、十分に研究されているとはいえず、しばしば、異常な犯罪行為や宗教活動に都市生活の病理を垣間見ることもある。

都市が舞台となった集団的狂気は、歴史的には、住民が群集化したときにみられた。ペスト流行時のホロコースト、「聖バルテルミーの虐殺」、関東大震災での朝鮮人の大虐殺など、宗教的憎しみ、偏見や差別がこうした行動の背景にあり、社会的緊張が一挙に、集団的残虐行為にはけ口をみいだしたのである。大都市住民の多民族化、文化の多様化は一般的現象であり、古代から都市文化の創造力の源泉となってきた。個々人がいわば裸の状態ですべて異文化と日常的に接することで生じる緊張を緩和するために、比較的大きな民族集団は都市内の特定地区に集まって生活するようになる。こうした都市空間の民族区分が穏やかにかつ創造的に異文化間のコミュニケーションを保証するように配慮することは、これまであまりにもおろそかにされてきたのである。

また都市は近代の歴史においてしばしば、革命運動の舞台となった。とりわけパリでは、大革命からナポレオンが権力をにぎるまで、そして1848年、1871年と、民衆蜂起やクーデタが生じた。民衆反乱の場合は必ずといってよいほど、狭く入り組んだ路地にバリケードが築かれ、鎮圧は容易でなかった。この経験の結果、パリの空間は、大砲を設置すればきに切り開く改造が行われるに至った。しかしながら、このような改造は、もし他国からの侵略をうけて市街地が戦場と化した場合のことを考えると必ずしも懸命な選択ではない。の侵略をうけて市街地が戦場と化した場合のことを考えると必ずしも懸命な選択ではない。その場合はむしろ、迷路のような複雑な都市空間こそ、制圧に時間のかかる一大要塞となるからである。

このように都市空間は、24時間のサイクルで動いていく日常生活の秩序を乱す恐れのある要素一意図的にあるいはその存在自体がそうする一を注意深く、塙で囲った「全制的施設」(ゴッフマン)に隔離してきた。スラムの撤去、ごみごみした繁華街の再開発や路上生活者の排除、さらには異文化集団を差別と偏見の、目に見えない壁によって囲ってしまうことも、都市が自ら生んだ混乱要因を物理的に解消するための措置であった。都市の中心



部にある高層化したオフィス街は、最も活動の集積度が高く、整然とした秩序が保たれているように見える。しかし、地面から離れてはるかに聳え立つ建築物は、あまりにも人工的な環境を維持するために、結果的にそれ自体が一種の隔離施設化してしまっている。それは中世都市の教会のような、人工的秩序への信仰を象徴するものでもあるが、同時にその秩序が地球の自然が本来もつ秩序の対極へ乖離していきつつあることの証明でもある。

## VI. 都市計画

日本の都市が「安全」で「便利」であるという評価を受けるとすれば、都市の様々な活動が円滑に行われるように、産業都市の機能の改善努力はなされてきたということであろう。戦後日本の国土開発は資料1の4段階の計画をもって実施されてきた。

1962年に策定された「第一次全国総合開発計画」に従って、大都市とその周辺に集中しつつあった工場を、地方の拠点に分散する政策がとられた。その結果、重工業中心のコンビナートをはじめ地方での産業拠点開発が行われた。高度成長期におけるこの開発は環境問題を地方にも多発させることにつながった上に、大都市への人口流入に歯止めはかからなかった。1969年の「新全国総合開発計画」は国土開発を点から線へと拡張し、高速道路や新幹線の延長により、北海道から九州まで工業地帯、大都市および地方都市を結ぶ産業の基軸を確立することになった。1977年の「第三次全国総合開発計画」では、はじめて人口移動に対して地方での「定住」を前提とした生活環境整備と地方自治体の主体性を尊重する方針が打ちだされる。しかし、景気の落ち込みにより地方での雇用が減り、ふたたび東京圏への人口集中が起こる。1987年の「第4次全国総合開発計画」の中では、「多極分散型国土」の構築のために、地方の中枢・中核都市を対象にした、新しい産業構造に対応する

これまでに策定された全国総合開発計画のポイント

	全国総合開発計画	新全国総合開発計画	第三次全国総合開発計画	第四次全国総合開発計画
1. 策定時期 (閣議決定)	昭和37年10月5日	昭和44年5月30日	昭和52年11月4日	昭和62年6月30日
2. 目標年次	昭和45年	昭和60年	昭和52年からおおむね10年間	おおむね昭和75年
3. 背景	1. 高度成長経済への移行 2. 過大都市問題、所得格差の拡大  3. 所得倍増計画(大平洋ベルト地帯構造)	1. 高度成長経済 2. 人口、産業の大都市集中  3. 情報化、国際化技術革新の進展	1. 安定成長経済 2. 人口、産業の地方分散の兆し  3. 国土資源、エネルギー等の有限性の顕在化	1. 人口、諸機能の東京一極集中 2. 産業構造の急速な変化などにより、地方圏での雇用問題深刻化 3. 本格的国際化の進展
4. 基本目標	地域間の均衡ある発展	開発可能性の全国土への拡大、均衡化	人間居住の総合的環境の整備	多極分散型国土の構築
5. 開発方式	拠点開発構想	大規模プロジェクト構想	定住構想	交流ネットワーク構想

注) 国土庁計画・調整局資料による。

資料1.<sup>17)</sup>

「高次都市機能」の整備がうたわれている。

高次都市機能とは、道路、上・下水道等の公共施設や教育・医療施設などの「基礎都市機能」に対して、「高等教育機関、大規模商業施設、コンベンションホール、美術館、博物館、そしてマーケティングや法務・経理のコンサルティングサービスなど、都市圏を越えた広域的圏域（国際的範囲を含む）における都市の活動主体のニーズに対して機能し、外部から財・サービスの流入を促し、あるいは、自ら新たな社会的・文化的価値を生み出すなど、都市生活の源泉となる機能を指す」<sup>18)</sup>。

現在この高次都市機能の集積度の高さは、50万以上の人口を有する都市と、30万以上50万以下の都市とでは、前者が後者の4倍であるという数字がだされている。第4次全国総合開発計画では、高次都市機能整備の対象とする都市を20万以上の中核都市にまでひろげようというものである。

地方都市の活性化に、当該都市はイニシアティブをとれないのは、財源を国や県の「補助金」にたよらざるを得ないという、日本の地方自治の抱える問題がある。しかし、逆に考えるならば、地方自治の主体となるべき住民からの提案がなかったために、地方自治が育たなかったともいえる。政党もおしなべて国政重視の立場をとり続けてきたし、地方選挙は、長い間、地元の活性化政策をめぐる争われることが少なかった。しかも活性化の決め手とされたのは、道路網の整備と大企業の工場誘致のような、全国の経済システムに直結するような開発であった。高次都市機能の整備についても、各地で様な試みがなされるであろうことはこれまでの例から想像できる。高等教育機関の誘致合戦などもその一例といえるが、悪循環を避けるためにも、地方都市の活性化には、遠回りに思えても地方文化の育成に重点をおき、住民の参加する都市作りをめざすことが第一であろう。

#### 注

1) 上田 篤・榎並公雄・高口恭行, 「都市の生活空間」, 日本放送出版協会, 1970, p. 28.

2) 藤田弘夫, 「都市の論理」, 中央公論社, 1993, p. 25.

3) アリストテレス, 「政治学」, 1330b.

4) キーン・モーリス, 「ヨーロッパ中世史」, 橋本八男訳, 芸立出版, 1978, p. 185.

5) 土井淑平, 「都市論—その文明史的考察」, 三一書房, 1997, p. 139.

6) *ibid.*, p. 237.

7) 内田芳明, 「風景とはなにか」, 朝日出版社, 1992, p. 191-195.

8) 上田 篤, 「日本の都市は海からつくられた」, 中央公論社, 1996, p. 187-190.

9) *ibid.*, p. 190-193.

10) キーン・モーリス, 「ヨーロッパ中世史」, p. 73.

11) フーコー・ミシェル, 「監獄の誕生」, 田村 俣訳, 新潮社, 1977, p. 38.

12) *ibid.*, p. 58.

13) *ibid.*, p. 59.

14) *ibid.*, p. 89.

15) フーコー・ミシェル, 「狂気の歴史」, 田村俣訳, 新潮社, 1975, p. 29.

16) *ibid.*, p. 74-75.

17) 酒田 哲, 「地方都市・21世紀への構想」, 日本放送協会, 1997, p. 63.

18) *ibid.*, p. 51.

## Espace Urbain et Ordre Social

Hiroshi TAKANO

*Department of Socio-Information*

*Faculty of Informatics*

*Okayama University of Science*

*Ridai-cho 1-1, Okayama, 700-0005, Japan*

(Reçu, le 6 octobre, 1997)

Les grandes villes des sociétés industrielles contemporaines envisagent les problèmes graves : c'est d'abord celui de la surpopulation et celui de la destruction écologique.

Le mot "civilisation", dérivé de "civis", signifie sans aucun doute un choix de façon de vivre mieux en modifiant et en créant le milieu. Ainsi, la population urbaine a été rarement affamée et pouvait vivre en sécurité. Car les cités et aussi les villes du Moyen Age étaient siège de pouvoir qui s'exerçait sur les zones tout autour.

Les villes modernes ont perdu ce pouvoir et été incorporées dans l'Etat. Elles gardaient cependant la puissance motrice de la civilisation grâce à la population qui venait du milieu pastorale et grâce aux marchés du monde entier.

Aujourd'hui, les villes comme Tokyo ou Osaka grandissent sans arrêt et s'écrasent sur leur propre poids. Il nous semble que la solution ne se trouve que dans la décentralisation des fonctions économiques et sociales.